

## 1. ピアノ独奏

近藤 文

『ベルガマスク組曲』

C.ドビュッシー(1862～1918)

前奏曲

メヌエット

月の光

パスピエ

題名の“ベルガマスク”とは、“ベルガモの”という意味で、イタリア北部のベルガモ地方に因んでいるとのこと。この言葉は、P.ヴェルレーヌ(1844～1896)の詩集『雅びなる宴』の一篇にドビュッシーが曲をつけた歌曲「月の光」の中でも、“ベルガモ風の衣装”や“ベルガモ舞曲”のように使われている。この詩集では、他にも、イタリア喜劇の役者や仮面舞踏会に集う人々が様々に描かれている。舞曲を組み合わせたバロック組曲の古風な形式を借りて、一幕の仮面劇が描かれているようで、深いところでヴェルレーヌの詩の世界と繋がっているようにも感じる。幕が上がり一気に舞台に引き込まれるような「前奏曲」。リュートやクラヴサンの音色にも合いそうな「メヌエット」。どこか悲しげな道化の歌声は、悲しくも美しく静かな「月の光」に溶けてゆく。軽やかなステップで踊られる「パスピエ」は、地の底から呼ぶ声に応じるように、照明と共にフッと消え、幕が下りる。

## 2. クラリネットとピアノのアンサンブル

クラリネット 井上 かおり

ピアノ 上田 啓子

ソロ・ド・コンクール

H.ラボー(1873～1949)

H.ラボーはフランスの作曲家、音楽教育者そして指揮者でもあった。父はパリ音楽院のチェロの教授、母は声楽家、祖父はパリオペラ座のフルート奏者、大叔母は高名なオペラ歌手という音楽家の家系に生まれた。パリ音楽院にて楽理をA.ジェダルジュ(1856～1926)に、作曲をJ.マスネ(1842～1912)に師事。1920年、G.フォーレ(1845～1924)の後任としてパリ音楽院院長に就任。C.サン＝サーンス(1835～1921)の流れを汲む保守的な作曲家で、“モダニズムは敵なり”というモットーを掲げていたことで知られる。本日演奏する作品は1901年に於けるパリ音楽院の卒業試験課題曲として作られた華麗な作品。課題曲らしく、6分弱という比較的短い時間に、音階、アルペジオ、テンポの速い部分、遅い部分、さまざまなリズムとアーティキュレーションなど、多くの“チェックポイント”が、詰め込まれている。



## 3. サクソフォンとピアノのアンサンブル

サクソフォン 山田 美和

ピアノ 宮北 昌子

『タンゴの歴史』より

A.ピアソラ(1921～1992)

Bordel 1900

Cafe 1930

『忘れっぽい天使Ⅲ』より

吉松 隆(1953～)

インヴェンション(磯田健一郎編曲)

『タンゴの歴史』はフルートとギターのために書かれた作品。4つの曲からなるこの作品は、1900年代から現代までのタンゴの発展の有様を表現している。本日はその中から、楽しく賑やかな様子が伺える「Bordel 1900」、甘くメランコリックな旋律が奏でられる「Cafe 1930」を演奏する。

吉松 隆は現代を代表する日本の作曲家の一人。上記の曲はハーモニカとアコーディオンのために書かれた作品で、変拍子と緻密なアンサンブルが印象的。本日はサクソフォンとピアノの為に編曲されたものを演奏する。

～ 休憩 ～



## 4. ピアノ二重奏

第一ピアノ 大澤 佳奈

第二ピアノ 谷口 香来子

ピアノ協奏曲 第5番

L.v.ベートーヴェン(1770～1827)

変ホ長調 作品73 「皇帝」

ベートーヴェンの協奏曲の中で最も有名な作品で、“皇帝”の名の通り堂々として絢爛豪華な雰囲気を持つ。第一楽章は、第二ピアノの和音に続いて第一ピアノが華麗に分散和音を演奏し、その後壮大な第一主題を提示する。第二主題は対照的な弱音で提示される。第二楽章はこの世のものとは思えない優美で夢みる魅力をふりまき、変奏手法を用いて展開される。転調後、次の楽章の動機を予示する。第三楽章は連続して演奏され、一転して躍動的な活気溢れる楽想が繰り広げられる。標題に相応しい豪華な楽章である。